# 立田山古墳群の再検討　その２

中原 幹彦

## はじめに

本稿は若干の遺物の紹介および現地踏査と新旧地形図の比較検討とをすり合わせることにより、地形とその立地から消滅した古墳の所在場所を推定することを目的とする。立田山古墳群の再検討その１―熊本博物館所蔵品を中心に―熊本博物館 2020 館報№.33（以下､前稿という）で、今後の課題の一つとして「消滅とされた古墳探し」をあげた。その課題解決の一助として、前稿の発表以降に立田山古墳群のうちＡ支群を除くＢ支群、Ｃ支群、Ｄ支群の高塚の古墳の追加の現地踏査を行い、立地について新しい知見を得ることができた。他の課題も、現地を踏査することである程度の目安もつくように思う。

前稿では、研究史および博物館が所蔵する各古墳出土の遺物の検討を通じて、本古墳群の築造年代と須恵器の産地の共通性から他古墳との関係を探り､被葬者の出自と故地について考察した。また、特に立地の共通性や文献の先行研究から古墳群と被葬者の性格－交通祭祀ネットワーク－やその後のことまで筆を進めた。

予定した遺物実測図の提示は２点のみで、周辺の同時代の集落との関係や生業、白川中下流域における周辺開発、再開発には今回は触れることができなかった。他日を期したい。

## １、白石古墳出土遺物

今回は、出土遺物のうち鍵となる須恵器坏蓋と坏身、新たに確認した他の遺物について概略を記す。

**須恵器坏蓋と坏身**（図１）

前稿で少数の破片（前写真９左半）を提示したが、ほかにも同時期の小片はあるものの、図示したものは同一個体で、坏蓋と坏身は同一産地のセットと考えられる。出土土器の中で、より古相の須恵器が少量出土することは他古墳にもあり、初葬における特徴の一つと考えられる。

２点とも、焼成は良好硬質、小さな黒色の発泡吹き出しが多く、外面は白色の灰被りをする。坏身外面には濃緑色の斑点状の灰被りもある。色調は外面薄黄白灰色だが、新断面は濃灰色。胎土に白色粒は少なく、黒色粒が多いという宇城窯跡群産須恵器の特徴を示す。

坏蓋と坏身では形式的な時期差はあるが、一般的に坏蓋には古要素が残るようなので、坏身で時期を知る。その特徴から時期は MT15 型式６世紀前半頃とみてよいだろう。この期の中央窯でのような著しい大型化が達成されないのも、地方窯の特徴とされる。

破断面に新しい部分があるので、掘り出されたときに割れたと思われ、現地にはまだ破片が眠っている可能性が高い。

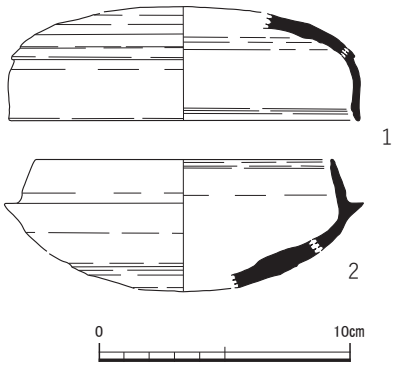

図１　白石古墳出土の須恵器蓋坏

**坏蓋**　破片２点、復元口径 13.7 ㎝、復元高 4.5 ㎝。器形は古相を示し、天井部は丸みを持たず、天井部と口縁部の境の稜は相対的ながら明瞭で、天井部下端と稜下の

口縁部側を強くなでることで現出させる。口縁部は直下して浅く内反し端部は肥厚してやや外反する。端部内面には浅いが坏身と比べると明らかな沈線が巡る。天井部の右回転ヘラ削り範囲はやや広い。

**坏身**　破片３点、復元口径 11.7 ㎝、復元受部径 14.3 ㎝、復元高 5.2 ㎝。器形には新旧の要素がある。立ち上がりと受部には古相がのこり、底部と回転ヘラ削り範囲には新相がみて取れる。立ち上がりは高いが内傾し、口縁端部は丸く収めるようなそぶりをみせつつ、その内側にそっと浅い沈線をめぐらせる。受部は外方につまみ出して断面三角形に厚く作る。端部は鋭い。底部には腰張りがなく丸みがあり、底部右回転ヘラ削りの範囲は狭い。

**他の遺物**（写真１、２）

『北部地区報告書』には「鉄器（馬具類？）残片もみられる」とあり、今回の鉄製品残欠１袋、鉄鏃３点がこれに該当すると思われ、他に小形砥石１点、紡錘車１点がある。ラベルは「熊本市黒髪町下立田（立田山）農林省出張所東側尾根上古墳出土資料一括 1960( S 35).4.26( 火 ) 収」「№ 1373 下立田」。砥石のラベルは「熊本市黒髪町下立田 古墳出土１点 1961( S 36).6.7(水)桜山中(生徒名)寄託」で、筆跡は土器類と同人物、裏面の砥石のスケッチはありがたい。土器類の確認採集の翌年で、その後もこの古墳が意識されていたことがわかって興味深い。ただし、検証が必要なのは言うまでもない。小形砥石はかなり使い込まれ、紡錘車は滑石製で上面孔の周囲はややくぼんでおり、頻繁な使用がうかがえる。

また、内部主体に関するであろう、粗い工具痕のある赤色顔料塗布石材１点と安山岩石材片５点があり、土器と同じ箱に入れられていた。赤色顔料は暗赤褐色で分厚く塗布され、石材は表面だけが部分的にはがれたような形状で、白く軟らかく安山岩と思われる。

写真１　鉄製品、砥石、紡錘車

写真２　赤色顔料が付着する石材片

## ２、立田山古墳群の立地再考（図２、３）

立地について、再度少し詳しく考えてみる。前稿では現存する古墳と丘陵間の支谷で支群分けを行い、古墳つまり高地からの眺望を主眼としたが、本稿ではこれを細分し、低地からの古墳を見上げる眺望も加味する。

新旧の地形図は、2500 分１熊本市国土基本図 78 黒髪平成 23 年 12 月撮影空中写真同 24 年９月現地調査同 25 年測量（これを新図という・図２）、明治 33 年式地形図図式準拠明治 34 年測図同 36 年製版同 44 年部分修正大正２年３月改版印刷発行の大日本帝国陸地測量部の二万分一地形図熊本近傍６号（共 14 面）（これを旧図という・図３）を編集して使用した。

## 3、各支群の立地について

**B支群　現存する古墳・宇留毛神社古墳（東）と宇留毛神社古墳（西）**（写真3、4）

『北部地区報告書』では3基の円墳が存在したとのことだが、現地踏査では2基の墳丘しか確認できなかった。松本1996も同様の記述である。

古墳は標高50 mほどの南斜面にある。南側平地を見下ろして比高は30 mほどである。南西方向にのびる舌状丘陵の先端に五高の森がある丘陵（五高の森丘陵）と高塚の古墳と横穴群の分布域の境の立田山墓地と熊本大学職員小磧宿舎がある東南方向にのびる舌状丘陵（立田山墓地丘陵）の境の凹部にある。

写真3　宇留毛神社古墳（東）

標高120 mの中央展望所から標高50 mの立田山墓地丘陵に続く900 mほどものびる長い尾根筋は、下る途中でいくつか枝分かれする気配をあらわしつつ、標高50 m付近で五高の森丘陵を南西に大きく派生させ、二俣地形になる。この二俣の中央最深凹部の丘陵分岐部分に両丘陵の翼に抱かれるようにB支群は立地する。

写真4　谷低地から見上げる

この両丘陵の間には小さな谷が入り境になっていて、B支群の現存する2基の円墳は五高の森丘陵に属し、その尾根基部の鞍部ピークより南側の斜面にある。また、現在確認できる盗掘坑の形状から内部主体は横穴式石室の可能性が高いとされているが、その場合、入口方向も南側を向いているようなので、B支群の意識は南方を向いていることがうかがわれ、西北方向のC支群の方には向いていないと考えられる。

なお、新図では西古墳の西に南から小谷が入り込んでいるようにみえる。踏査してみるとこの部分は大きく深くえぐれた部分で、形状から近年の土取り工事の跡のようだ。これにより、以前は存在したはずの3基目の古墳が消滅した可能性がある。

**旧図を見る**（図3）

立田山墓地丘陵の南などには現状ではわからない小谷がいくつか入り込んでいたようで、他も現状とは異なり凹凸のある地形だったことがわかる。宇留毛神社古墳の下位の参道右側には、現在はない溜池があり、ここから参道と分岐して細道が両丘陵間の小谷沿いに山を登り、現在の遊歩道と合流する。豊前街道の北西、参道の両側は集落で、現在は黒髪6丁目である。

宇留毛神社は五高の森丘陵からの南に派生した小尾根の上にあり、古墳もこの小尾根上の南向き斜面に上下に列をなして立地していたと思われる。やはり、B支群は南を意識していたことが、旧図を見ることでよりはっきりと推測できる。後に記す石川山古墳群第2次調査地と同様の立地である。

**古墳から見える風景と谷低地からの眺望**（写真4）

古墳あるいは神社からは、白川がすぐ下に近くに見え、そのさらに南には保田窪の家並みや甍

の波が延々と続き、江津湖から嘉島町や城南町の台地に至り、やや右手には宇土半島の大岳山脈が黒々と横たわっている。

南側低地には丘陵裾野まで家々が建ち並び、現状では古墳を見上げ難いが、南向きの斜面で低地は広く、他の支群に比べて最も開放的な景観である。

**C支群　現存する古墳・立田山南麓古墳（上）**（写真5～9）

円墳は標高60 mほどの斜面に所在する。C支群の基本的な地形は南西の低地に向かって、二つの尾根が下りるものである。このうち、一つ目の西側尾根は分岐せずに単体でまっすぐに下り伸びる。標高50 m付近から上位は、南展望所に向かって斜度約27度で傾斜がきつく尾根幅も狭くなり、古墳築造には不向きだろう。下位は斜度約14度で傾斜は緩くなり幅も広く、この程度の斜度であれば古墳築造は可能と考えられる。実際、北区植木町石川山古墳群第2次調査地（中原1996）も斜面地に造営された5世紀後半から6世紀にかけての7基のほぼ一列に立地する小規模円墳群で、斜度は約12度だった。

二つ目の中央展望所から立田山墓地丘陵に続く長い尾根筋は、途中の400 mほどのび下った標高60～50 mで南西に少し膨らんで台地状となり、西側尾根とともに景観を作り出している。西側尾根との谷をはさんだところのこの台地状部分の西側縁辺に古墳は現存する。この部分の東側と南側にはまだ古墳築造適地としての余地があるようにみえ、また、低地に続く標高40 mまでも緩やかな斜面が続き、築造適地は広いようだ。

また、新図ではわかりにくいが、現地踏査により台地状部分の東側には浅い谷がはいることが分かった。これにより、C支群には右翼（西側尾根）、中央（円墳が所在する台地状部分）、左翼（東側小尾根）の3カ所の古墳築造適地が分かれて所在することになる。ただし、東側小尾根は狭く築造にはやや難があるかもしれない。

写真5　西側尾根

図 2　新 図

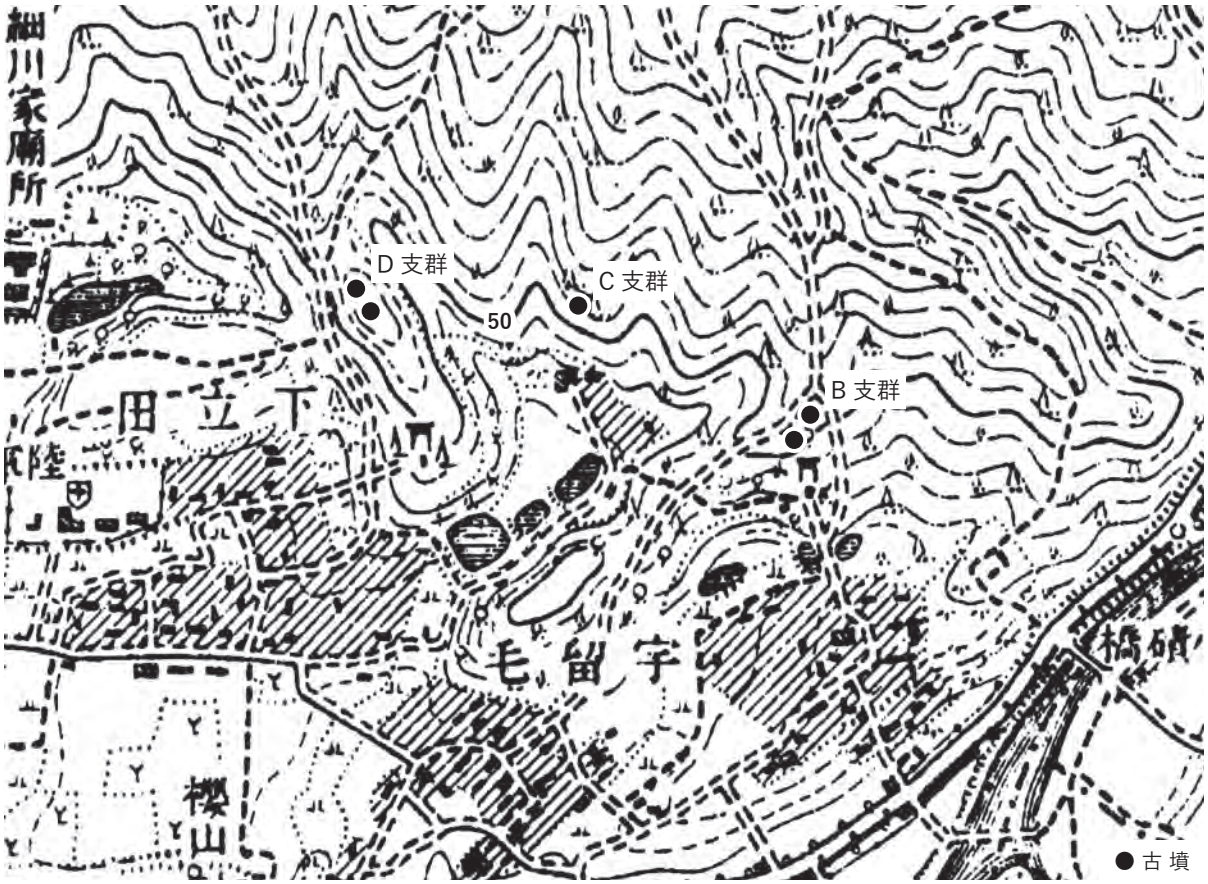


図 3　旧 図

このようにみると、西側尾根と東側小尾根も可能性はあるが、やはり中央が最も古墳築造には適していると考えられ、南西方向から谷に入ったときに、正面に見える位置で景観的にも最もふさわしいと思われる。

**旧図を見る**（図 3）

この図の斜面には右翼（西側尾根）、中央（円墳が所在する台地状部分）、左翼（東側小尾根）の 3 カ所の明瞭な短い尾根筋が鋸歯状に確認でき、現地踏査の成果と合致する。中央の等高線が平面的にも一番緩やかで、古墳築造適地であることが理解される。現状で東側小尾根が不明瞭なのは、旧図作成以降に開墾などで地形に手が加えられた結果と思われるが、最近の開発のような根こそぎの大規模な改変は行われておらず、いまだ、旧地形の名残を留めているといえるだろう。

写真 6　この中央斜面上部に古墳が立地する

写真 7　C 支群中央斜面の角度

写 8　C 支群に散在する岩石

**旧図の集落の痕跡**

低地の西側山付には、元禄 15 年（1702）赤穂義士四十七名のうち 16 名が肥後細川家にお預けになった際、応接方として懇切に接待した堀内伝右衛門の隠居屋敷があったとされ（平成 6 年 11 月石田正治氏設置の現地説明板による）、旧図でも確認できる。その東の平坦地、現在の春の森緑陰広場には集落もあったようだ。

小さな谷奥とはいえ、江戸時代以来人々の往来があり、近年まで集落があったことを考えると、古墳のあった場所は『北部地区報告書』でも記されているとおり、古くから開墾され畑にされたことで、現状では見えにくくなっている。また、集落の近くに散在していたであろう古墳の石材は格好の基礎材として採取され、種々に転用されたことが考えられる。

**古墳から見える風景と谷低地からの眺望**（写真 9）

古墳からは左手の五高の森丘陵と右手の下立田神社のある南東にのびる舌状丘陵（下立田神社丘陵）の間のため池のある細い谷地の隙間越しに桜山中学校方面がよく見える。南西低地を見下ろし比高は 35 m ほどである。ただし、眺望がひらけるのはこの向きのみで、他支群と比べて最も閉鎖性が強く、独立した空間を現出している。

古墳の南西の低地は五高の森と下立田神社の間の縦に三つならぶため池がある峡部から古墳に向かって扇状に広がる場所である。視点を変えて谷奥の古墳に向かって歩いてみると、くびれ部から低地に入ると急に視界がひらけ、明るく、まるで別世界に足を踏み入れたかのような感じを受ける。「古墳の谷」の如き景観で、あの世とこの世の境の葬送の場としては、非常に良い舞台である。旧制五高生が堀内屋敷一帯は「まるで桃源郷の如く閑静で風光明媚なのを見て、勉学には理想的な場所と考え」（同説明板より）たのもうなづける。

写真 9　低地から C 支群を見る

**D支群　現存する古墳・城床古墳群と白石古墳など**（写真 10、11）

標高 60 mほどの狭長で広い平坦面を持たない下立田神社丘陵の地形にあわせて 2 ～ 3 基の円墳が一列に並んで立地している。現存古墳の北方上位は標高 60 mをこえたあたりから、冬の森に向かって急に傾斜がきつくなり、鞍部の幅もさらに狭まり地山の岩石が露出するような古墳を築造するには不向きな地形になる。

写真 10　D 支群丘陵の南方を見る

下位は現状では遊歩道から南方の下立田神社に向かって 200 mほど標高 56 mの平坦な場所があるので、古墳が所在してもよいような地形である。しかし、現地には畑の区画かとも思える石列や段差や溝があり、旧地形が残存しているのか疑問が残る場所である。

**旧図を見る**（図 3）

現在の遊歩道とは異なる細道が北方向にのびており、幅広の道との交差点あたりから等高線が南に向かって細長い閉鎖曲線になっている。新図にはみられないもので、この場所が独立したすこし小高い地形であったことを示している。現在残る 2 ～ 3 基の古墳はまさにこの場所に所在しており、古墳の立地がこの小高い場所を選んでいたことが考えられる。

写真 11　D 支群西の谷底、正面上に古墳が立地する

**古墳から見える風景と谷低地からの眺望**（写真 11）

高所の古墳からは、南西に白川右岸の熊本大学、桜山中学校、子飼の町並みや白川の流れが見える。さらに、南方では五高の森が標高 53 mほどで少し邪魔するものの、白川左岸に広がる台地やその先の熊本平野が延々と宇土半島や雁回山まで続いているのが見てとれる。低地との比高は 40 mほどである。

低所の古墳西側の東西方向の深谷には細川家菩提寺泰勝寺跡があり、蓮池が点在する。この谷の東奥は標高 36 mで真上にちょうど古墳が所在し、比高は 20 m以上。かなり仰ぎ見なければならない。古墳の威厳を高めるにはよい舞台装置である。さらにこの谷は南にも少し入り込んでおり、葬送の列はこの主谷低地から傾斜の緩やかな南側を上り粛々と古墳に至ったことが考えられる。

**古墳と横穴群の群構造の相違と類似**

Ｄ支群の細く長い低地から古墳に至る形は、浦山第 1 横穴群やつつじヶ丘横穴群などの細長い墓道や大前庭部を共有する状況と景観イメージが重なる。Ｂ支群やＣ支群の古墳のありようも、斜面や崖面に立地する横穴群の群構造の多様性に通じるものがある。

古墳と類似するという考えは、上野 1967 でも浦山第 1 横穴群「この大前庭部は規模こそちがうが羽子板形の平面を有する横穴石室墳によく似ている」と指摘されており、古墳築造地については地形の制約ばかりではなく、人々の葬送観念との関係も含めて語るべきだろう。今後も考え続けたい。

## ４、小　結

立地と築造適地の広さから、各支群の本来の古墳基数を推定してみる。Ｂ支群で５～６基、Ｃ支群で７～８基から 10 基ほど、Ｄ支群は５基程度で合計約 20 基以上の所在が推定される。現在は古墳が確認されていない五高の森や森林総合研究所九州支所の独立丘陵にも古墳、あるいは何らかの遺跡、例えば横穴も含めた立田山古墳群全体の統括的な祭祀の場などの遺跡が埋もれている可能性も、立地と地形から推測できる。

個別の立地景観については、Ｂ支群は最も開放的で、意識は南方に向く。下から見上げた時、広い両翼の中ほどの斜面に古墳がまとまって並ぶ姿。Ｃ支群は最も閉鎖的だが、眼前の広場が共同祭祀の場で、谷に入った時にその正面の視線の先には多くの古墳が面的に広がり、印象的に視界に飛び込んできたことだろう。Ｄ支群は狭長な場所にあり築造には制約が多そうだが、独立性は高い。仰ぎみた時に古墳に高低差は少なく、横一列に並んで見えた。などと推測でき、それぞれに特徴がある。

このように考えると、Ｂ支群、Ｃ支群、Ｄ支群の築造主体はそれぞれ別集団で、集団ごとに占地し墓域を形成していたことが想定される。それらは古墳数や規模から集団構成人数や力の強弱と関係し、職掌も異なっていたことが考えられる。

今後は古墳やその被葬者を理解しようとする場合、古墳が所在する台地ばかりでなく、下位の低地の地形も含めて総体的に検討することが必要になるだろう。

## おわりに　－アルケオロジーのススメ－

アルケオロジーとは言うまでもなく「歩けオロジー」のことで考古学の英訳 archaeology のもじりである。考古学の基本は現地をよく歩き回ること、とその昔よく聞かされた言葉である。

「なぜ、この古墳はここにあるのですか」この素朴な疑問、考古学専門講座生の方から発せられたこの疑問の言葉の意味を深く考える必要がある。この疑問に対して何らかの答えを出す努力を続けなければ、考古学で地域の歴史を読み解くことは難しくなる。先学のいうとおり、今あるものからばかりで考えるのではなく、今はなくなってしまったものからも、実証の上に立って推理し復元して語ることが必要である。

最近の考古学はともすれば机上のものとなり、しかも細分化され、一般方々からは遠い存在になっていると感じる。考古学をもっと身近なものとし、考古学自身の未来を拓くためにも、「考古学は楽しい」「考古学は面白い」を実践することが求められている。

なお、立田山古墳群の中でも特にC支群一帯は、現状でも自然公園として多くの市民に親しまれているが、さらに多くの方々に足を運んでもらう工夫の余地はあると聞く。この工夫の一つとして、現存する立田山南麓古墳一帯の発掘調査を実施して、古墳や旧地形を復元し「古墳公園」として整備すれば、旧制五高生が桃源郷とも考えた豊かな自然と古くからの文化が一体のものであることを、強くアピールできるだろう。今後も、この身近にある意義深い調査フィールドを歩き回りたい。

**主な引用参考文献**

1967　上野辰男「熊本市浦山横穴群」『考古学雑誌』第53巻3号　日本考古学会
1996　松本健郎「宇留毛神社古墳」『新熊本市史』史料編第1巻考古資料　熊本市
1996　中原幹彦『石川山古墳群Ⅱ』植木町文化財調査報告書第8集　植木町教育委員会
2002　美濃口雅朗『つつじヶ丘横穴群』熊本市教育委員会